

※通巻45号(2006年6月発行)～48号(2007年3月発行) 編集担当:木場 英久(現・桜美林大学教授)
通巻87号(2017年6月発行)～ 編集担当:本杉 弥生(企画普及課)

おおしま みつはる
大島 光春(学芸員)

編集担当 通巻34号(2003年9月発行)～44号(2006年3月発行)
期間 通巻73号(2013年6月発行)～82号(2016年3月発行)

古生物学を担当しており、イノシシやクジラ、トガリネズミ(モグラに近縁)の仲間などを研究し、展示では恐竜などを担当しています。十数年ほど前から子どものための展示をはじめ、展示手法や展示解説手法など「伝える術」の研究にも取り組んでいます。

A1. 「博物館で、研究者なりきり体験～海洋コアを食べよう～」石浜佐栄子
通巻74号23～24ページ

海洋コアの実物から必要なサンプルを採取することを「食べる」と表現します。本当に食べると(たぶん)おなかを壊します。でも、海底から採取した大切なサンプルからほしい部分を申告し、分け合ってみんなの満足を作り出す過程は、この記事になったイベント(私も食べるコアを運んでいます)で伝わったと思います。

「なりきり」は一見ばかばかしく見えますが、そのものの本質へと踏み込む最初の

一歩になることを意図しています。そして、楽しみながら大まじめに考える。その根底にあるのはサイエンスの楽しさと、それを伝えたい学芸員の気持ちなのです。

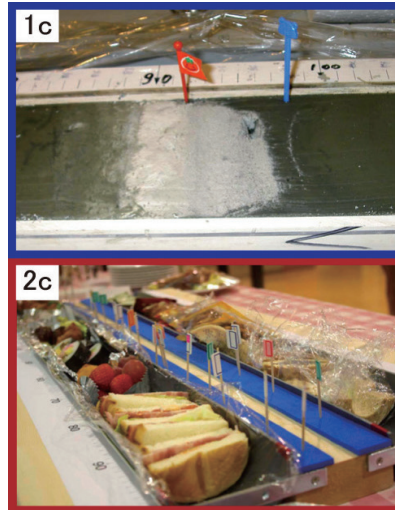


図. 通巻74号掲載の図4 目印の小旗を立てて。

A2. 紙面に穴が開くことが最大のピンチと思われるかもしれませんが、それだけ

ではありません。ピンチというか、大きな出来事としては、大幅な予算削減がありました。博物館では開館当初からほぼすべての印刷物を編集ソフトで制作し、印刷・製本(「とびら」は製本しません)を外注していました。それ故、予算を削られると緩衝できる余地はなく、即、印刷不可能になります。2014年と2015年がどちらも3号しかないのはそのためです。2014年度の予算が前年の半額になったために2014年9月と2015年の3月に発行するはずだった号が抜けています。ご存じでしたか? それ以降「とびら」は電子出版へ移行していきます。

A3. 電子出版となったので、印刷のことは忘れてデジタルの可能性を追求していくようなニュースレターになるのかなあと考えています。たとえばハリー・ポッターの映画に出てくる新聞のような、写真(3D映像)になり、飛び出す、動くような出版物(?)になると楽しいですね。

いしはま さえこ
石浜 佐栄子(学芸員)

編集担当 通巻49号(2007年6月発行)～60号(2010年3月発行)
期間

専門は地質学・堆積学で、地層のはざ取り標本や砂の標本を集めたり、地層に残された証拠から大地の歴史を調べたりしています。

A1. 編集担当となって2号目に、節目となる通巻50号を迎えました。「せっかくだし、何かやってみたら?」という周囲の声に押され、過去49号分の表紙写真を並べた表紙をレイアウトしてみたり、当時館内で進行していたホットな話題について



図. 通巻50号記念展示(ライブラリー横)。

館長や学芸員に執筆してもらったりして、記念特集号を編集しました。ライブラリー横のミニ企画展示コーナーで、50号分すべての冊子を並べて展示したことも印象的でした(図)。通巻1号と2号は、保存してある在庫がなくて「誰か余部を持っていますか?」と大捜索した記憶があります。

これに味をしめて、2008年には特別展「箱根火山」にちなんで、箱根に関する特集を組んでみたり(54号)、「メイキング・オブ・『箱根火山展』」を3号連続で執筆してもらったりしました(52～54号)。企画を立てて、各学芸員のところに「こんな内容の記事を、〇月〇日までに書いてください!」と突撃依頼に行くのですが、意外と皆さん二つ返事で引き受けてくれて助かりました。

A2. 秘密ですが、一部の冊子の印刷発注を連絡し損ねていたことが一度ありました。色々な方のご尽力により、どうにか事なき?

を得ましたが。もう時効ということで。

A3. 自然科学のとびらは、最も博物館らしくて、読んで楽しい刊行物だと思います。最新の研究の情報あり、特別展や企画展に関する記事あり…博物館で今起きていることを分かりやすく、しかもちょっとした「知りたい!」欲求を満たす程度のしっかりした文章量で紹介しています。専門家による信頼ある記事ですから、専門用語でインターネット検索した時にヒットすることも結構あります。

近年、予算削減により冊子体の印刷ができなくなり、学校などに配布することができなくなってしまったのは大変に残念でしたが、当館ウェブサイトではすべてのバックナンバーがご覧いただけます。学芸員の「伝えたい!」と、みなさんの「知りたい!」が出会う場所、それが博物館の刊行物の役割であり、自然科学のとびらの存在意義だと思います。これまでも、これからも。